

## 辻邦生のパリ滞在(1)

### Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木 涇\*

SASAKI Thoru

いま手元に数枚の写真がある。菅野昭正編集による『作家の世界 辻邦生』(番町書房、1978年)に掲載されている「辻邦生アルバム」の一部で記念写真である。5人の中央で、左のこわきに分厚い2冊の本を右手で支えて抱え、左手にはカメラのひもをからめ持ち、ぶら下げている若き辻邦生がいる。写真の説明文は「昭和32年9月、はじめてフランスに旅立つ日の朝、幸福感にみたされていた。フランス郵船・カンボージュ号にて。左から辻佐保子、なだいなだ、辻邦生、なだ夫人、橋元秀教」となっている。若き辻邦生と言ってもこの時点では31歳で、20日ほど後に32歳の誕生日を迎えたのは、カンボージュ号がコロンボに着いたときだった。ところで写真に写っている辻邦生はネクタイをしておらず、痩せ気味である。口はしっかり閉じ、口もとの両端に緊張感があるのだが、微笑んでいる。そのために頬の肉が盛り上がり、旅立ちの嬉しさと、皆に見送られるてれとが見てとれる。

かくして辻邦生の3年6ヶ月の旅が始まったのは1957年9月4日の横浜港からである。マルセーユまでの34日の船旅、1080日のパリ滞在、3日間のスイス・ローザンヌへの小旅行、南仏・イタリア旅行(38日)、ギリシャ・南イタリア旅行(21日)、スペイン・南仏旅行(30日)、南ドイツ、スイス、オーストリア旅行(28日)そしてマルセーユから横浜までの32日間の船旅が、離日中の足跡となっている。再度横浜の埠頭に立ったのは1961年3月3日である。それからほぼ12年後の1973年7月に『パリの手記 I』を河出書房新社から出版し、1974年4月までにあいついで、計5冊を刊行し

た。ゆうに90万字を超えているはずだ。出版するつもりで書いたわけではない。辻邦生が、小説を書けなかった時代のことを語るとき、必ずといっていいくらいに口にすることば「ピアニストの毎日のレッスン」のごとく書いていたことの証拠である。この手記から辻邦生のさまざまな体験を知り、パリ滞中にどんな意味があったかを見てゆきたい。

#### 1 決意、不安、予感

フランス船カンボージュ号で日本を離れてから、パリ到着後1週間ほどのちに佐保子夫人を迎えて、落ち着きを得るまでの様子をまず見ておきたい。

カンボージュ号の4等船客となった辻邦生は、アジアからヨーロッパに向う船の寄港地や船内の様子を書き記している。香港で乗りこんできた中国人、サイゴンからのフランス人兵士、他に知り合った多くの人たちの印象や語り口、話された内容などだ。注目してよいのは、9月16日のサイゴンで書いた日記である。「フランス行きが、公式的には、フランス文学と語学教育のためという看板なのに、僕自身、ひたすら文学的な開花を、この体験の中にかつたごとぶつかって、ひきだそうとする進退きわまった冒険にはかならない」としている。「文学的な開花」を求めるのはなんとしても小説を書きたかったからだ。詩的な精神と科学的な精神の対立がゆえに、詩的な精神の分野に属する小説家にとって現実の重みを如実に示す科学的な精神に対抗できない。そんな状態に落ちこんでの旅立ちであった。だからこのように『パ

\* 教授

りの手記』に書きつけるのはひそかなる「決意」に他ならない。

だが不安もある。9月12日のマニラでは香港の印象を語りながら次のように記す。

僕は香港ではじめて支那人とその生活をみたのだが、やはり、それになじめぬ何かがあるのに驚く。それに、中共から除外されている華僑たちは、昔どおりの尊大さ、まだ不潔さを身につけているのかも知れぬ。ともあれ、西洋と東洋の間にはさまれ、どちらにも、しっかりととけこめない自分を感じるのは、必ずしも島国根性とはいえない。(『パリの手記 Ⅰ』9月12日。以上ことわりがない場合は本書からの引用とし、日付のみを記す)

東洋出身でありながら東洋になじめないのはなぜか。フランス文学を専攻しても西洋になじめないのは、東洋人であるから当然であろうが、いずれにせよ、どちらにも「とけこめない」。その原因は、「必ずしも島国根性」ではないとする。では他に何かがあるのか。これに関連させてよいだろう。パリに着いて3日目の10月11日の記述には次のようにある。

OやKの十分な消費生活をみていると疲れてくる。その話を聞いているだけで不安になる。金はなく、そして、生活すべき中心がない。そのうえホテル住いでは、どうすることもできない——そんな気になる。彼らの間にいると、船の中ですてきた筈の日本がかえってくる。自動車展にいて、また日本だ。どうしようもない日本——。だが20歳にもならぬKの落ち着いた自信には、もう僕のような戦前のどうしようもない日本に育ったものには、ただ羨望を感じるばかりだ。すべては失われ、すべてが流れ、崩れてゆく。僕は日本人からは同じように逃げださなければならぬらしい。まだ僕は、おそれているものを克服しえないのだ。……(略)……しかし僕を苦しめるものから、僕は逃れることもできなければ、逃れたって無意味なことがよくわかる。それは克服されなければならないが、それが不可能とあれば、ただそれに責めさいなまれるほかないのだ。だが、僕を不安にさせるその幽霊の正体が、日本的な感受性や考え方、物の見方であるとすれば、僕は、それにかわるだけのものを持たねばならない。(10月11日)

「OやK」とは、パリに着いたばかりで、まったく不案内の辻邦生を導く日本人の友人たちだ。

この「幽霊の正体」を「日本的な感受性や考え方、物の見方」とする点に注目しておきたい。襲った不安は、旅の疲れからなのか、金銭的な不安、それとも不案内のパリでの今後の生活、そしてひそかな決意に対する可能性を見出し得ないことによるのか。いずれにせよ、自分に宣言するかのよう書きつける。

僕は、小説のスペシャリストになるために来ている。ただそう思うことで、僕は救われる。そして、絶えず、何か書いていないと、不安なのだ。おそろしい不安に陥ってしまう。情熱のない生活を、僕はもう続けることはできない。市民生活の中には、規律ある頹廃しかないのだ。(同)

この引用する直前の部分では、「日本の現実の中で、また自動車のことを書いたり、関係したりすると思うと、総身から冷や汗が出てくる」と書いている。大学院に籍をおいて、自動車会社に嘱託として勤務していた時代のことを思いだしたのだ。確かに腰を落ちつけての仕事ではなかった。そのためもあるかもしれないが、辻邦生自身のなかでは、それは偽りの生活であったに違いない。そのまま定職として同僚の生活と同じであっては自らの生は無為に終わってしまう。本当の自分の生を見失ってしまうことになる。それゆえに辻邦生は「規律ある頹廃」とするのだ。

翌日にはやや落ち着きを得ているが、「誰にも会いたくない。日本語も喋りたいとは思わない。淋しくも不安でもない。むしろ日本的なすべての空気から逃げだしたい。この日記でさえも……(10月12日)」としている。辻邦生自身の内部で問題が整理され、しぼられたとしてよいだろう。それにしても、こんなにも日本や日本人を避けようとするのはなぜか。さらに詳しく見るのは章をあらためてから触れることにして、さらに問題を提起したい。

それは認識の問題である。船旅が始まって日々が単調となってきた。神戸港を出て5日目の日記を見よう。

精神の怠情を許さぬこうした素材の世界に囲まれ、単調な風景に接していると、いきおい、ぼくらは、無意識のうちに、さまざまな精神の装飾でそれらを飾る

ものだ。それは、あるものがあるがまに見ないというのではない。感情のヴェールで美化しようとするでもない。それらは、精神の軟弱さが許容される間に起りうることだ。ここでは、生活のための、限度まで切りつめた簡素さがあり、我々の肉体がそれに適応することによって、精神まで、この簡素な必要の限度まで切りつめられるのだ。精神も肉体と同じく、〈生きる〉ための手段を、もっとも簡素な形で見出そうとする。すぐ消えるもの、表面的なもの、見せかけのもの、他人のためのもの——つまり文明が強いる虚栄と無意味な礼節は、ここでは、精神を殺すほかの何の役割も果さない。このように、単調ななかで精神が生きていくためには、精神自体が、最も素朴な生命力に帰らなければならぬのだ。(9月9日)

「単調な風景」とは、船内の自らを含めた客たちの日々の状態をさす。つまり船に乗ることは運ばれることが目的であって、なんら生産的な仕事は求められているわけではない。だから「簡素さ」とは生命を維持するための生理上の行為をさしている。つきつめれば食と排泄の行為のみだ。したがって「精神」もこれらに関心をもつだけにすぎない。だが船上での客の一員としてさまざまな人々との交遊があれば、これに腐心することになってしまう。このような状況にあって「精神の軟弱さ」とは現実の世界に圧倒されていること、「つまり文明が強いる虚栄と無意味な礼節」が大手をふっている世界に迎合しようとするに他ならない。そうであってはならないために「精神自体が、最も素朴な生命力」を必要としているのだ。このような思いも事物に対する認識を深めたからだ。その時点での「認識」に関する一定の見解を見ておきたい。

僕は一方認識というものを、単に主観のままに動く、任意な、恣意にまかせたものでは、不十分であると思っている。もちろん完全なものへの到達は不可能であるとしても、能うかぎり(気分がたとえ向いていなくとも——と僕の場合なら云えそう)知り、探索し理解することが必要である。ここで僕は冷静物に動じぬていの、認識の機械たちに深く尊敬の念をいだくということになる。僕は、告白すると、本気で、この冷静な機械になろうと思ひ、高等学校をでると、もの凄く勢いで勉強をはじめた。いわば、自分に無縁なるものを、自分の認識の糧にしようとして。

(9月16日)

ところがこの「認識」については、限界を覚え、未だ明確に定義づけることはできずにいた。

僕が客観的認識と思念をこらしても、所詮、認識そのもののためというより、認識に先立つ知的虚栄心が、はなはだ満足されるのを味わうに他ならぬという結果になってしまった。知りたいと思うことが、そうした事柄が、僕のような気質では、体系的な、ビブリアグラフィックな操作と読書のうちに、何となく色あせ、いらいらし、それが知るための努力と思えなくなってくる。がとも角、僕は廻り道はしなかった。それらのもっている長所が、身にしみて分ったからだ。と同時に、それらのもつ欠陥——というより、認識というものの意味が靡げながら、解ってきたような気もする。それが同時に、僕を、ふたたび文学創造の世界へ引戻す動機となったことだけは事実のようだ。(同)

単にものごとを知りたいと望み、知るだけでは「文明が強いる虚栄」に他ならず、つまり「知的虚栄」を満たすのみで、精神の強い生命力を満たすことにはならない。あくまでも客観的事実を整理し、体系的に並べた世界を知っただけだ。これを認識とすることはできるが、辻邦生の「靡げながらわかってきた」「認識」とは違うようだ。このことも章をあらためてみてゆきたい。

そして10月5日には地中海に入り、船の食堂でフォーレのレクイエムを聞く。この歌のためかギリシアのことを考える。

フォーレを聞いたせいか、はじめて、ギリシアが僕のギリシアとして目覚めてくる。これは、僕の、男として立ちうる堅固な主張でなければならない。どのようなギリシアがあっても、僕には何の関係もない。僕のギリシアでなければならない。もちろん、Aがいなければならない。それは僕たちの、孤独な僕たちだけの、ギリシアでなければならない。しかし、それは、どこか滑稽なアクセントがある。所詮、それは僕が内側からの真の理解に達するまでは、競争心も、ジャルジーも、虚栄も、すべて僕を何ものにも到達させまい。独占は男の強烈な欲望であるが、男である以上、それをまもるために戦うか、失うかしかない。その両方できなく、しかも独占にこだわるのは、男としてなすべきことではない。信仰の薄き者をとがめたキリストにも、いくぶん、ぶはあるのだ。しかし僕が信じるべきは、内心の複雑にわかれたその一つ一つの要素ではない。おそらくそのようなこだわり方をすれば、信仰は薄くなるほかあるまい。僕らは、それらにも拘らず、

何ものかを実現しようとしている。あるいは、何らかの形を与えざるを得ないのだ。古代ギリシアには、何かここに調和があり統一がありえたとはいえない。愛はこのような調和の可能性をもたらしなないであろうか。それは、とも角、愛というものの最も甘美な感覚に、いま、目ざめている。それを、何かがおびやかすとするれば、自己讃美を自他に強いる自尊心でしかない。全く別個であることに満たされ、充実し、甘んじる男らしさが、ないからなのだ。繰り返して書く必要があるだろう、男とは地上に立っている英雄にはかならない。彼は生きるために、考え、書き、働き、戦う。それ以外に何があろう。彼を内省させるのは、愛しかないとすれば。

(10月5日)

Aとあるのは佐保子夫人のことである。

自らの内部が統一されていない今、確実なのは愛のみであって、それ以外はなんのまとまりもない。上で見てきたように認識に関して明確な位置づけがなされていないからだ。海の彼方にギリシアがあると知って、古代ギリシアに思いを馳せ、「調和と統一」された世界が「愛」あることで可能ありとする。望見していた辻邦生に、そのギリシアは、彼の旅行の時に応えるのであるが、このギリシア体験のことにも章をあらためて触れる。ギリシアに対する思いがすでにここにあることを指摘しておくだけにする。

便宜上、辻邦生がパリで落ち着くまでを一つの区切りとしたのは、1958年1月19日の日記に「この部屋に住むようになってようやく、パリの住人らしく落ち着いたような気がする」とあるからだ。ホテル住まいの後、エッフェル塔の近くに住み、1月半ばからモンパルナスに越してからの日記である。ここまでの日記には、それまでの様々なことのおきさつ、例えばパリ到着の時のこと、友人たちのこと、そしてフランス語の熟達に対する決意や日本に帰ってからの「文学的野望」についての考えなども記されている。

## 2 日本、日本人

### 2-1 嫌悪の対象たる日本

先にも引用をもって示したが『パリの手記』で辻邦生は日本もしくは日本人に対する嫌悪を書き連ねている。これをまず追ってみたい。

パリに着いて5ヶ月を経て、小説論に本格的に

取り組み始めたのもこの頃であり、その論の展開にゆきづまっているときである。1958年3月8日づけの日記のほとんどは日本に関することが書き連ねてある。その論旨をたどる。

友人Oのところで読んだ日本の雑誌や新聞からことが始まる。正確には「X」のバリを書いた雑誌掲載の短篇小説を読み終わった時点から始まり、その読後感を「後味が悪い」とする。

その湿った、平凡な、日本の感性は、どうすることもできない悪臭のように、僕にからんではなれない。僕のきらいな、なれ合い生活。それが僕らの感性を冒しているのをまざまざと感じるのは、全くやり切れない。私生活を原稿の材料にしたり、私的交遊を「文学」にする戯作と風流人趣味。それが、僕らの心を、空白な、自分につまずくことを知らぬ湿った性格へと作りあげてゆくのだ。本を読んでも、何かをみても、心にひびくものは、ごく少なくなってゆくような気がする。交遊にしてすら、そうだ。(1958年3月8日)

いわゆる私小説の悪しき部分を敏感に感じとり、嫌悪している。その一方で「X」の小説を「読むにたえない」とするのではなく、パリの生活は「よく描かれて」おり、読者に抵抗を与えるものではない」としている。だが「しかし」と書き続ける。

しかし——しかし、僕は、ほんとうに、小説とか詩とか——芸術が、いやになる。胸がむかつく。それは確かに、僕にしたところが「リュクサンブール公園のサフランは……」でなことを書くに違いない。書いておることはない。そんなことにこだわることは、却っておかしいのだが、だからといって、この、一種の痴呆さを、黙認することはできない。ひとにいう必要はあるまいが、すくなくとも自分には、許せない。今にして、僕が日本につくづく愛想がついたというのが、単なる感傷であり、底のみえた口実であることがわかる。日本に——ではなくて、僕らのつくっている日本に——と訂正しなければなるまい。(3月8日)

「胸がむかつく」のはなぜか。つまり雑誌に掲載された作品が、平然と芸術作品とされることに對する抵抗だ。ここに「リュクサンブール……」と書くことは「一種の痴呆」がある由縁としている。この「リュクサンブール云々」は、いわば神のような位置にいて書く態度に違いない。だが、

この時点ではこの第三者による客観的視点で書く意味を明確に見出しはしなかった。だから「感傷」だとする。日本そのものを否定しているのではなく、当時の時点での日本人にあいそがついたということになろう。そんな日本を変えるとすれば、辻邦生は、つまり「僕らを幸せにするものの探求にでるとすれば、それは無限の運動になるだろう(同)」とした。これは日本での社会改革、もしくは変革を求めての行動を意味している。これについてがまんでできるにしても、「胸のむかむかを押さえること(同)」はできない。通常の人で生きることを単に好としない。小説家たらんとしている限り、辻邦生はかくのごとき日本で生きることが不可能だった。積極的な意味での人生は設計できない。だから、次に引用する文章の口調の激しさを見て欲しい。

君たち、何を、そんなに、ムキになって生きているんだといえば、恐らく「お前さんはうまく立ちまわって、うまく人にとりいって、その揚句に涼しい顔がしてられるんだ。オレたちは腕一本、生きて生きて生きぬいて、有利な仕事と有名という特権の中で、とも角、人間らしくなりたいのだ」と答えるかも知れない。もっとあわれな人たちは何というだろう。人間の過剰といっても、文明文化といっても、あゝ、本当に、君たちの平面を拡げていったって無限にのぼしていったって、何にもないんだ。全く同じだ。全く変わらない。年をとり、少しお金がで、世の中がわかったような気になるだけだ。僕は今にしてよくわかる。精神のいるのは、この平面ではない。この湿地ではない。冷たい怒りに、机の前に坐しても、何にもならない。それは次元がちがっているのだ。それは一つの象徴の世界であり、魂の世界であり、残酷な犯罪人の心理が働く場所なんだ。少し年をとり、少し世間がわかるようになったって、いったい、それが、君たちのいう芸術と何のかかわりがあるのだ？ その中に帰って、僕もまた少し年をとり、少し世間がわかるようになるのか。湿った、人情の眼で、君たちをみるのか、愚劣な、永遠に愚劣な君たちの芝居に、同情しろというのか。真っ平だ。僕は、氷のとざす山嶺の空気をこそ愛せ、その孤高と拒否をこそ愛せ、君らにつき合うのは、真っ平だ。どのような機智も、どのような逆説も、また、どのような思想も、十年たてば、色あせてみえる現状なのだ。どんなに誠実であっても、どんなに力んでも、君たちにはできない。僕は、非人間的であることが、今ほど、人間的であると思ったことはない。……(略)……人間であることとは、生活の平面に拡

ることではなく、それに垂直に立つことなのだ。人間である以外に、何が僕らに残されているというのか？  
(同)

俗の世界にあって、崇高な理念のもとに社会改革を遂行しようとしても、その作業は無限に続けなければならない。蟻螂の鎌のごときものを振り回しても徒労に終るだけだ。先の見えたむなしさがあるだけだ。だからこそ、精神の優位性をなんとかして示したいとする思いが強く現われている。そこには高踏的な姿勢がうかがわれ、その意味では、俗の世界にあってはそこで同じようにふるまうのは、真の意味での人間ではない。そうあってはならないのが人間だ、と高らかに宣言しているのだ。このように日本の社会をとらえている限り辻邦生の日本で住む場所はない。彼の苦渋が解りすぎるほどに伝わってくる。

## 2-2 人間、生活、孤独

容易にこの苦渋は払拭できず、4月30日の日記でも再び日本の小説を読んで「やはり胸がむかづいてくる」と記す。「その幼稚な人間観とモラルは未開人なみ」とききおろし、「愚かしい空想力の中で書いている」とする。欧米の探偵小説でさえ「少なくとも人間の立っている無意識の基盤が、たしかに、人間らしいのだ」と「人間」を強調している。この「人間」ということに関して5月2日づけの日記では、ヨーロッパと比較しながら考えを展開しているのでこれを見ることにする。

日本の雑誌を外国で読むたびに「変な気持」になった辻邦生は「一番コッケイ悲惨なのは西欧をやたらに有難がっている西洋文学者や、知能の足りぬ小説家が自分を作家作家とよんでよこんでいる」こととし、「小さい島国におしこめられた1億に近い人間の、とざされた狭い、一面的視野の中の低能さ」を有していると断言する。それを今やパリにいて、理由を考える。

文芸雑誌だから、相変らずというよりほかないが、それは何か、「生活」というものの喪失のうえにつくられた架空の世界であり、その前提が誤ったためにすべての推論の過程があやまってゆくというのにも似た感じをうける。  
(5月2日)

人間の基本的部分として必要な「生活」に関する概念が登場した。つまり、人間の生活を無視してはならないとする。小説から「生活」が失せている限り、人間の基本的部分は喪失している。そして何も小説に限らない。その「生活」を確かなものとして保障するはずの政治にしても同様だ。そして日本人の政治の意識の低さを「日本全体の精神性の低さ」としてフランスを引き合いに出す。

僕は、フランスに来て、フランス人の不親切、粗野、荒っぽさ、ずるさ、なまけぐせ、偏狭さ等々を現実に知り、夢の国がどこかにいったようで、少々、おどろいたものであった。しかし、日がたつにつれて、すくなくともパリの住みやすさ、楽しさは無限であるの気がついてきた。僕は、つい、ふらふらと何時間も歩き、歩きすぎてぐったり疲れて、はじめて自分の歩きすぎたのに気がつくほどだ。町の美しさはたしかに表面的だし、フランス人のお世辞も我々の心の底とは何の関係もない。しかし、ここに実体をそれと指摘できずに存在している一種の高い精神性を、僕はやはり否定できないのだ。(同)

フランスでの「高い精神性」とはどんなことか。この問題はしばらく棚にのせておきたい。辻邦生の考察は続く。日本の精神状態はどうかといえば、精神的営みが、フランスのそれに比べて「文明の高さ」にまで達しておらず、「非人間的な倫理観と日本の情緒と明治以来のエセ近代性」とが雑居している。義理人情や親分子分、家族主義的な倫理として現れるのが、非人間的な倫理観であり、「人間というものを精神の中にもつことができないところから生まれる歪められた人間観」であり、人間を疎外している。この現象が文化人、学者を含めた日本の精神的空間すべてに現れているとする辻邦生は、ヨーロッパの人間観と比較する。

我々の考える「人間」とは——すくなくともヨーロッパ文明が作りあげた人間観とは、単なる動物的人間でもなければ、高貴な精神だけによって固められた人間でもなく、実は、人間の生活のすべての営みを許容し、そのうえで、社会という約束を、相互の生活の営みを、よりよく可能とするため、認め合っている、いわば一つの架空の世界から生れている。そしてそれ

はもはや感覚となり、肉体化され、確実な現実と考えるようになっていく。したがって、人間は独立しているが、同時に肉体という個体の中にとじこめられた孤独な存在であり、どのような手段によっても、これを解放することはできない。地位も金銭も名声も恋愛も、窮極的なこの孤独を、自我の意識を、放棄せしめない。たとえ一時的に忘れさせうとしても、感覚的に、彼らの中に目ざめている。「人間」とはこのようなものとして存在している。もちろんヨーロッパがこのような人間観をつくりあげるには、ギリシア・ローマとキリスト教をぬきにしては不可能だったろう。ただ、かかる「人間」が、現在までの諸文明を通じて、もっとも質の高い精神性をもつことができたことだけは確かである。(同)

棚上げしておいた「高い精神性」についてはもう理解できよう。人間の生活のすべてを受け入れること、つまり社会における約束、人間相互の生活を認めることであり、「人間」として存在することだ。辻邦生が驚いたフランス人の「不親切、粗野云々」は、実はこの「人間」として存在することに立脚している。フランス人それぞれの自らの思想を、生活を、個性を守っているからに他ならない。その考え方は同時に他者のそれらをも許容している。むしろ「社会と云う約束」を前提とした上で。

さらに辻邦生は続ける。それにしてもヨーロッパの人々がこのような人間観を持っていながら、愚かな戦争をし、様々な悪徳を犯すが、それはまた「よりよくなる可能性」を秘めていると指摘する。つまりこの人間観があつてこそ愚かであったことを知り、その回避も可能だとする。

それ故にこそ、彼らは我々が恋人を愛しているとき、共感的にウインクできるのであり、悪徳に対して、悪徳を回避する手段を考えるのであり、情緒に対して、その惑溺をアイロニカルな表現で現わしうるのであり、職業に対する大人らしい自信と適応とをもつのであり、また、政治を技術と考えることができるのである。それはたしかに最終的な孤独という恐怖からのがれることができないが、逆にそれを男らしく甘受し、耐え通すという精神的な緊張にもなって現われているのだ。(同)

「高い精神性」を保有している姿である。辻邦生が日本では目にすることができなかった光景だ。

日本の精神状況を完全に否定する辻邦生は、さらに日本の好ましくないさまを繰り返し、「すべて人間以前の、不可解な混乱した濁ったかたまりにしか過ぎない」として、「個人の責任もなければ、個人の尊厳もない」とする。このような状況の中で文学者は「このような人間」を書くことはせず、「約束としての社会性、精神の枠がない」状態にある。ここから生じる私小説作品の多くを、辻邦生はしりぞける。

「書く」ということは、自分の外にある行為であり、それはそれ自体の制約も形式も、また距離も当然つきまとうのだ。そのうえでこそ、孤独な人間が、それを見とめ、それに適応しようと試みるのだ、だからそこには、「文明」という高度の地盤が直接に示されるのである。しかし日本の文学者には、そのような地盤がなく、自分で適当に自分を区切ってゆくほかない。

(同)

この日の日記は、欧米人の職業に対する態度について思考が及んで終わっている。職業は、人間の社会にあっては一種の契約であり、その範囲内での献身と誠実があって、同時に人間として仕事との結びつきが意識されている。だが自分は人間であって、自分と仕事とは全く別のものであり、外的な行為を通して結びつくのみだ。つまり「仕事は、生活の手段であるとする責任感と距離感が同時に生れている」。この結論から辻邦生が導き出すのは「芸術もその例外ではない」とする点である。日本の文学にかかわる精神風土はこの結論とは一致しないと、これまで見てきたとおりで明らかだ。かくして私小説は否定されなければならない。そして「人間」のいる場所について思考する。まず前提として次のようにする。

「仕事」と「生活」は切れており「生活」と「自分」も切れている。

(同)

翌日の日記でも触れている。

僕は昨夜、孤独の意識の欠けていること、俗にいえば近代的個人が確立していないことが、日本の否定面のすべてに関連すると書いたが、日本人が自らの長所としている自然への愛好（和歌、俳句等）あるいは情緒的感受性（能、カブキ等）などにも、それは決して

生産的な、発展の可能性をはらむものとして現われていない点も、指摘する必要がある。僕らが日本のインテリに現われるセンチメンタルな要求をにがにがしく思うのも、これときわめて似た面があるからと思われる。

（5月3日）

この日の日記は砂川基地反対闘争を見にいったとき抱いた、いくつかの疑問について書いている。その代表的な例として「心にクイは打たれまい」という標語をとりあげ、革新的な運動においてさえも幼稚な日本人の精神主義が、ここに現われていることを指摘している。闘争にはこのような感情的な要素は必要ない。技術的な問題、現実の救済や対策を考えさせるよう、より効果的な成果をあげるべく合理性が必要だとしている。それというも感情は「思考をもっとも怠惰にさせる」からであり、このことを強調する。

日本の雑誌を読むと、この種のセンチメンタルな、思考のにごりがいたるところに見出せる。人間が一個の孤独な存在であり、そこから、はじめて物との関係が出発してゆくの、それがないうために、たえず、思考は情緒の中へ拡散し、また情緒は強い感情にまで高まることがない。自分のことを、つねに、びくびくと心配し、他人がどう云っているのかに気を廻す。もし人が自らの絶対的な個性を実感しうらなら、他人などというものは、自分と対立したものにすぎず、そこには礼儀と社会的約束が支配するだけであって、自分を駆りたてるものは、物・人と自分との対向した関係なのだ。自分は自分でしかないという切りはなされた感じ、その自分さえ十分に把握しえないという個別感、他の評価などを、本質的には必要としない。物（人をふくめて）と自分との実際の関係の方が、本質的な関心をひくからだ。

(同)

### 2-3 自己のなかの日本

かくして辻邦生は否定すべきものを明確にし、彼自身のうちに絶対性を求めるべく他者との関係について思考を展開した。残る問題はその日本的なものが自己のうちに宿していることであった。それを「自分のなかの危険の兆候」とし、彼自身の「意志よりも自らの自然の生命のリズムに従って」いても「危険はここにある」とする。そしてフランス語で書きつける。

Pourquoi dois-je critiquer toujours la civilisation

japonaise? Je n'en sais rien. Mais ce que je sais, c'est d'en avoir avec moi—dans mon âme—l'élément négatif.

(なぜ僕は日本の文明に対していつも批判しなければならぬのか? 何にも知らないのに。しかし、僕の知っていること、それは僕の魂の中にその否定すべき要素が僕とともにあることだ。—引用者訳)

(『パリの手記Ⅱ』6月16日)

その時点で、苦悩する辻邦生は、もっぱら「自分の中からこの人間蔑視にもとづく日本的思考を排除する」ことであった。

その翌々日の日記には、日本文学について思考を重ねている。日本の文学には「いかに生きべきか」だけが書かれている「としてもいいくらい」と断言したあと次のように続ける。

ところが日本文学にあっては、主人公ないし作者の自己正当化ないし救済への欲求が、そのまま作品の動機と内容を、多くの場合、形成している。恋愛、性欲描写にしても、それが人生全体の一部分にすぎないのを忘れて、それが人生であるかのように書く。…(略)…思考、見方の一面的な限界、平面的な把握も、すべて、日本人の心性の、「全体」を意識することの稀薄から生れるように思われる。例えば一つの会話、一つの描写にしても、それは、まったく単純に常識的な連続によって引き受けられるにすぎない。平面的な印象はこのようなところからも生れる。実際の生活においても、平面性というか、劇的要素の欠如というか、または個の喪失というか、そのような単調な、慣習的な様式からぬけでることができない。少くとも、そのような慣習的要素が生活の大半を占め、もっとも思考と結びつけられた独創的領域は、きわめて微少である。僕はしばしば日本人の自我の境界の不鮮明さにその因を求めたが、それは同時に、「人間」全体に対する把握の曖昧さも意味する。…(略)…(フランスでは)権威というものをつねに、固定した慣習、様式の中に求める日本の官僚意識とは全く異なるといわねばなるまい。日本人は自分の意識を全体にひろげている。切りはなした「他者」というものをもたない。すなわち政治学の働く余地がない。これは人間関係が、集団表象として把握されている証拠にならないだろうか。実際は「他者」であるものを、「他者」とみることができない。僕をしばりつけている日本の特殊性は、何とか放棄されなければならないが、それがとくに否定的に働きたすような場合、勇を鼓して戦う必要がある。情感的特殊性にしても、それが思考の進行を歪めるかぎりではやはり集団表象が経験を排除すると同じく、

僕らに致命的な退化を強いる。(6月18日)

自らの内部にある否定すべきものはさらに明確になった。日本的情感の「悪しきロマンティックから脱却すること」をめざし、「日本的な価値意識、判断の基準に対する批判」を持ち続けること、そのために「〈他人〉という集団表象を排除して、〈他者〉という精神の政治学に」考えを移すことを命題としたのである。

もちろんこのような考え方に至ったのはパリにあってこの地の様々なものを見た上での思考作業を重ねたからである。ヨーロッパでは人間を中心にすえて考えていることを指摘した上で、彼らの「自分に対する安定、権威は見えていて気持ちがいい」とする。「フランスでは批評はあっても個人攻撃はない」とするのは、「自分が決めたことを誰に恥じる必要」も「気がねする必要」もないからだとする。そして辻邦生自身が「ヨーロッパを十分に自分の中に肉体化」して、はじめて日本の「悪しき影響から」脱することが可能だとした。彼らの「他者」に関する精神、つまり集団表象を排している考え方では発想そのものが情感的ではない。「他者」との関係には「事実」しかない。したがって「事実」をそのまま受け取る。このような様子を見た辻邦生は自身の生活姿勢に取り入れようとする。

「事実」の前だけで、立ちどまり、また立ちどまるという生活が必要だろう。つねに一つの「事実」から他の「事実」へ移り、決して「事実」のほかで、「事実」を推測したり、恐れたり、いきごんだりしないこと。読むのに疲れたりあきるといふことはありうるから、それならば書くなり、散歩するなり、誰かを訪ねるなりすればいい。しかもそれらがつねに「事実」である必要がある。何らかのもののための準備、手段、前ぶれではなく、そのものである必要があるのだ。なぜなら「行為」というのはいや応なく「事実」だからだ。「情感」とはそのような「事実」との直結をさける心性の中に否定的要素として育まれる。感動——とくに詩的感動とは、そのような「事実」との直結を通して、その中から深い、力強い、魂のエネルギーとして生れる。情感とはいわば全く土俗的な集団表象の一表明であるにすぎない。(同)

このような考え方を獲得した辻邦生は日本のイ

ンテリについて言及する。「事実」と直結する「個人」がいらないために判断が曖昧となっていると指摘し、しりぞける。かくして日本の文学についての見解が示される。

いかに生くべきか、いかにすればいいのか、のあがきは、日本の特殊な心性に由来して、しかも現実から離れることをしか教えないと。(同)

今や辻邦生にとって「現実から離れる」ことは許されない。現実との関係を「事実」とすることでその関係を探り当てる必要があるからだ。この日記には、「事実」の重ね方としてヘミングウェイの『武器よさらば』の会話文に思考をめぐらして情感の伴っていないことを指摘している。そしてこの日の日記の最後には次のように記す。

平面というのは、一つから一つへの移行が、前に即しすぎているところから生れる。本質的なものから本質的なものへ自由な飛翔が、立体的効果を生む。一つ、一つの要素が連続的に見えながら、それが多くの余分な要素の排除の結果であることを、ヘミングウェイの描写は示している。「全体」をとらえること、つねに人生のすべての広さを意識すること——そこからこのような人間、社会その他への態度が生れるのだらう。(同)

極めて日本的である私小説が、情感をともなった認識であることを批判し、それが自らのうちにあること意識し、警戒しながら自らの生活スタイルの確立を願ったのである。このことは辻邦生の小説論にさえも有効だった。そしてこの「他者」との関係、ヨーロッパ人の孤独を深く認識すべきごとを知る。

この年、1958年の夏に辻夫妻は南フランスに行く。佐保子夫人がポワチエに居る間、辻邦生は、ドイツ人のペーター、フランス人のクロードらと共同生活に入る。そこでのできごとで彼自身が自らの日本人たるを知る。まず書き出しで「かなしみ」とは、「日本特有の心情」で「慈悲とか悲願とかいう仏教の匂いが」つきまとい、欧米人のもつ「乾いた構造物」である「個」からは「生れない」と疑問を提出する。そしてエピソードである。

僕はクロードとペーターと共同生活をしながら、言葉や慣習やその他から、当然ひとりになることがあるのだが、これを当然のこととして受け入れられず、何かわびしい、ひとりぼっちのさびしさ、恋しさとして感じてしまうのだ。もし彼らがそうであっても、彼らはそのことにはとくに何も感じないであろう。元来、ひとりの筈の人間、そして契約して社会をつくっている人間なのだから、孤独は自明のこととしてしか、現われないのだ。何もこの二人に感心する必要はないので、それぞれにいいところもわるいところももっている。しかし、午後、ながい散歩の間、ぼくは口数がいつもより少なかったし、最後には、別々に帰ったりした。そういう時の僕の反応は、仲間はずれにされた少年時の心情と、さしてかわっていないのを見て、驚いた。その心情の続いている間、僕はどうしても、その原因がつかめなかった。夕食後(生タマネギとトマトとパン、バター、牛乳)、僕は、ペーターに事。「あま「何かおこっているのか」ときいた。「全然」という返りつかれすぎただけだよ。」それで僕の置きべきをかいだひとりぼっちの感情は急に解放され、なくなった。つまり、彼らなら、そんなバカげた心情に立ちいたる前に、もっと話し合ひし、それも徹底して云い合うから、こんな心情が温存されるけがない。彼らはつねに定理まで、自明のところまで達している。僕は日本人がお互をいたわり尊敬するためにとるあの煩瑣な礼儀、コンプリマン(お世辞—引用者註)を考えると、この障壁が僕らを定理にまで達しさせない最大の原因なのかも知れないとも思う。「かなしみ」とは個人の枠のない自由に微妙に感じるところに生れるといったが、この個人の枠が定理をつくる以上、枠のないところには定理もありようがない。すなわち、定理があってもそれに達しないばかりか、そのうえ、定理は存在しないのだから、これはもう、ただ、行動とは無縁の、したがって非時間的な、向い合った鏡のように、無限にそれ自身のなかへ入ってゆく特殊な感情となるほかない。僕にとっては、これは不必要な感情だ。定理から出発すること、その前で低徊しないこと、これが僕の一つの掟である。自己弁明や、相手への憶測や、様々の定理以前のばかげた内容が、どんなに僕ら日本人の感情を支えていることか。そんなことへのエネルギーが、定理の上に立つドラマへと向わせないでいる。そこには葛藤、いうならば弁証法的な運動が生れないのだ。ある種の行動の稀薄さ、同時に感情の単調な波の拡がり、そこから生れるばかりである。僕は欧米の三文小説、ハリウッド映画にいたるまで感じの一つの基本的な態度を、前から感じてはいたが、いま、ようやくその形をつかむことができるような気がする。僕が「日記」のなかへ、ヘミングウェイを書きこんだのも、この定理以前のモヤモヤした感情の皆無であることを云いたかったからだ。僕は日本の特性と

いうカクレミノによってこうした感情を温存したくない。すくなくとも友だちの間ではそうだ。そしてそれが日本の社会形態を支えるものになるといいと思っている。  
(1958年8月5日)

具体的に日常生活の中で味わった体験を記したわけだ。そしてこの問題は自分自身のあり方へと発展してゆく。それについては章をあらためて触れるつもりだ。

#### 2-4 とらえなおした「日本」

日本を離れて1年半の後、つまり1959年3月13日の日記には、日本人の西洋人の捉え方について考えを展開している。西洋を先進国とし、日本人は西洋人に対して劣等感を持っている。それというのも西洋人を抽象化された優位の人物としていて、現実にも目の前にいても隣の日本人を理解するかのよう、容易に理解できない、とした。これが第二次大戦後、アメリカ軍の占領によりある程度解消されたとしても、理解の及ばぬところでは根拠のない優位を与えてしまう。これを次のように分析する。

それは日本人のなかに、漠とした劣少意識を与え、追従を生み、あるいは勝手に想像した影像へ(イデアルな影像へ)奉仕するという優越感をつくりだす。日本人はきわめて現実的な民族だが、同時に現実と和解的、一体的に暮している民族だ。したがって現実を非人称的事実として処理し構成する能力に欠けるところがある。これは西洋人に対する態度のなかにも現われる。彼らが日本人をどう感じるかは知らない。しかしすくなくとも直接会い、話し、理解し、感じることであれば、同じ人間の範疇に加えざるをえないであろう。これに反して日本は西洋人をこのように現実的に処理することができない。彼らは西洋人とも和解しなければ近づくことができない。しかし一方では和解をこぼむものがある。そこで日本人は勝手に幻影をえがき、この幻影と和解する。それが職人だろうと会社員だろうと、また学者であろうと、そのような差異をつくりあげることにはできない。  
(1959年3月13日)

さらに生活様式が日本のそれよりはるかに違い、近代日本の憧れでもあったことを指摘し、西洋人の顔を見ればそのような生活の中にあると見なすのは無理からぬとした。

西洋と日本とは一つには決定的に風土が異なる。風習が異なる。そして、それぞれ両者とも必要な理由、由来があるのだ。僕らが、それらの現実的な要求とその現われとを、現実的に感じ、そのものとしてそこに位置することができないなら、逆にヨーロッパそのものをも、現実的に感じ、そのものとして、そこに位置せしめることができないだろう。僕らは幻影をはぎとるという行為よりも、つねに、どこでも現実的に感じうる力を、もう少し強く、もつべきであろう。(同)

ここに至っては辻邦生はいずらに日本を批判することはしない。かつてのように激しい口調にはならない。「現実的」になることを提言する余裕さえ持ち始めている。ところがそれから20日ほどした後の4月6日の日記では、辻邦生自身が「みじめな日本」という実感を味わってしまったことを吐露している。フランス人ジャーナリストが日本の様々なことをからかったことが原因であった。「フランス人一流の適当なシニスムと常識主義のパカロレア式知識とフランス中華思想」によるものであったのだが、不機嫌になり、腹を立てた状態になってしまった。しかしこれについて「こんな状態に我にもあらず迷い込んだのは、いい経験だった。しかしこれが最後であるように祈る」と書きくくっている。

そしてもう一点、黒沢明の映画を見たあとに日本のことを書いている。前のできごとよりさらに半年後、つまり日本を離れて2年後の10月24日である。「世界に通用する何ものか」をつくるためには、現実の日本の生活様式を経ること、その上で「普遍」まで高めなければならない。「日本」を避けてはならないと強調している。

すべての人が「日本」を避けてとおっていったら、「日本」という人間の一つの文化形態、一つの遺産がムダになるというものだ。それは「日本」を避けていきなり世界に共通した「西洋的なもの」へとびつき、それを発展させようとするのが、やはり人間の発展のためだとすれば、それは順序が逆だ。僕らが僕ら自身を通してしか精神的なものへ達しないと同じように、その固有の文化の母胎を通してしか僕らは世界文化に達することができない。外地で「日本」を見るということは、よくもわるくも、刺戟になる。

(『パリの手記Ⅳ』1959年10月24日)

パリへ来た頃のような、日本を呪うかのような目で日本を見ることはもうしていない。日本を宿命として背負うような思いも、あきらめもここには見あたらない。むしろ日本文化として誇りさえうかがえそうだ。そして考え方の転換を記す。

外から「日本」をみてはさかしく思うよりは、むしろ内から「日本」のなかにおいて「日本」の姿のままを、より高い方へと差しあげてゆかねばならぬわけだ。それはまず日本のありのままを、ひとにも自分にも、はっきりさせることだ。それが価値判断を含まず、地上の一事実とみられるところまでいったときに、つまり「日本」の必然性が「西洋」の必然性と同じ次元で理解され、肯定され、共感され、共に担われるときに、それは、次の発度への契機をもつ。僕らの欠点は「日本」を愛しながら避けていることだ。日本はいいと思うが、つねに「西洋」の幻影（それは現実の西洋ではなく、理想化された価値基準だが）が僕らをおびやかす。そして、いいと思う反面に、それを否定しようとする心が動く。一方は現実以上に日本を評価し、他方は現実以下に日本を評価している。大切なのは、日本はいいと思う前に、日本のありのままの姿をみることだし、また「西洋」の幻影をすてて日本の現実を回復することだ。 (同)

日本を離れて二年後には、このように日本を明確に見定めた。これ以降日本、もしくは日本人に関する詳細な思考作業の展開は見当たらない。辻邦生自身が日本に関する一定の視点を獲得したのだから当然のことだろう。次に日本が登場するのは、日本上陸寸前のときだ。すなわち1961年3月3日である。その前の日には神戸港に着いて幻滅を味わったようだ。すでにその思いを、なおパリで留学を続ける佐保子夫人に手紙を書いたために日記には書かれていない。神戸から横浜に向う最後の夜に日本人について書く。

日本人は集団表象から個別化し、上級段階にうつ

てゆく過程で、不完全なままのまま発達したような形跡がある。……(略)……個別化するとは、自己から他を見ることだし、自己と物と有効性において結びつくことだが、日本人の場合、自分を他人によって意識させようとし、自己と物とは、この「他者」の意識によって関係づけられる。……(略)……日本人は孤独を知らない。……(略)……日本人は「他者」に耳をすます。……(略)……日本人は「他者」によって評価されることのできる共同体に参加する。……(略)……日本人の「自己」は裏がえしにされた自意識の上にある。近代的自我の「告白」は、自己がこの世における唯一の存在だということから生れる。しかし同時に、この自己は偶然的な自己をこえた普遍的意志をあらわしていることを知っている。かかる普遍的意志としての自己が自己の必然的生を見出し、そこに「人間」=「自己」の形象、意味をつかみだすことである。日本の「告白」は、偶然的な生を「他者」にゆだねるところになりたつ。自己を空虚化することで裏がえしにされた自意識を完成させる。これはおそらく実利的な近代国家が人間の自我にもとづく実利性によるにもかかわらず、天皇制という信仰の共同体をつくりあげることによってはじめて実現しえた日本の特殊な歴史的状況から生れている。ここではブルジョワは、「自己」の原理にしたがうには、まず「他者」とならなければ、それを実現しえない、という奇妙な原理を強いられる。「自己」となるためにある種の集団表象を温存した。そして「自我」となったとき、このばけもののような日本的自我ができあがったわけだ。しかしそれもはや歴史の歯車でくだかされている。

(『パリの手記 V』1961年3月3日)

上陸すべく日本を前にして、この手記を日本と日本人をこのようにとらえた。注目してよいのは、「日本的自我」の完成は時代と歴史によるとした点である。辻邦生が幼かった時は、この「日本的自我」が跋扈しているときであった。日本を離れてすっかり成長過程で染みついたものを洗い流したのだ。

(以下次号)

(1997. 1. 7 受理)